

ナショナルチームドクター・トレーナーが書いた 種目別スポーツ障害の診療

林 光俊●編集主幹 岩崎由純●編集

〔評者〕武藤芳照(東京大学身体教育学教授/2008 年 第 34 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会会長)

平成 18(2006)年, 沖縄で開催された第 32 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会(岡崎壮之会長)で, シンポジウム「求められる競技力向上のためのスポーツドクターとは?」(座長: 武藤芳照, 福林徹)が行われた。

水泳, 陸上, バレーボール, 体操, サッカーの 5 競技のスポーツドクターと各競技の一流選手・指導者のペアによる計 10 名のシンポジウムであった。スポーツ現場のそれぞれの立場から, 同じ目線で, 率直に発言し合うことの大切さと面白さを改めて知らされた, 記憶に残る意義深いシンポジウムとなった。そこで最も強調されたのは, 「スポーツドクターが身体を診るのは当たり前, 一人ひとりの選手の心の動きを診てケアしてほしい!」という選手・指導者サイドの声であった。

そのシンポジストの一人として, 本書の編集主幹である林光俊先生(杏林大学講師)が参画していた。平成元(1989)年より, 日本バレーボール協会科学研究委員会医事部に所属し, 全日本チームドクターとして, 約 20 年にわたって, 現場での医療を担当してきた活動実績と貴重な経験の一端を真摯に報告されていたことが, 印象に残っている。

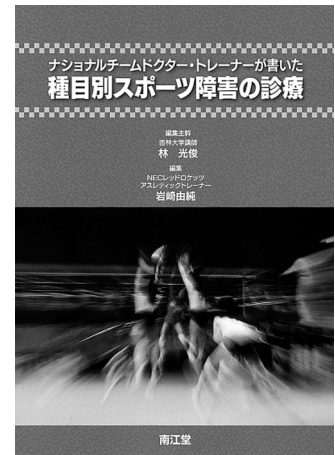
林先生の基本姿勢は, スポーツ現場での医療は, 選手の立場からの全人的医療に徹すること, ドク

ターとトレーナーとの連携・協力が必須であること, 地道な実践活動と経験が重要であること, スポーツドクターはスポーツと医学の架け橋となることに集約される。

そして, 本書は, まさしくそうした基本姿勢がスポーツ医学の実践的教育・啓発書の形で具現化したものである。

B5 版全 30 頁の大部の書に収められた知識・技術・経験, そして意見と要望は, 実に幅広く, 豊富で全体の構成・執筆には次のような様々な工夫がこらしてある。

1. 競技種目別(陸上競技, 野球, 水泳, サッカー, バレーボール, バスケットボール, 柔道, ボクシング, バドミントン, テニス, ラグビー, アメリカンフットボール, 体操競技, スキー, スケート, レスリング, ウエイトリフティング, トライアスロン, 剣道, ゴルフ, ハンドボール, 障害者スポーツの計 22 種目)の項目立て。
2. 発生頻度順のスポーツ外傷・障害に関する記述
3. 各種目に精通したドクターとトレーナーのペアでの執筆
4. スポーツ現場で求められる観点(発症メカニズム, メディカル・リハビリテーション, 現場の評価, リコンディショニング等)の詳述。



5. 文献・数値より経験を重視した執筆方針
6. 逆引き目次として引用できる「スポーツ障害部位別目次」ドクター・トレーナー間の言葉の相互理解を深める「トレーナー用語解説」, 現場の逸話からの生の教訓を伝える「TOPICS」等の独創的な頁立て。

本書は, 整形外科スポーツ医学という学問分野が, 今後どのように進み, 発展していくべきかを思索する時に, 重要な方向性を示してくれている。

本書が, その序にあるように, 「医療の現場とスポーツの現場をつなぐ架け橋」として, 広く愛読されることを希望する。

B5/頁 530/2007 年
定価(本体+税)7,035 円
南江堂 刊